ストーンヘンジ遺跡により、アトランティス文明の存在が実証された。

投稿番号：

(SHOUJI Yoshinori) 庄司義則
https://orcid.org/0000-0002-1704-7038

Introduction: 序論

アトランティスは、古代ギリシアの哲学者プラトンがその著書に書き残した、１万年以上前に大西洋上に存在したとされる伝説上の古代国家である。このアトランティス伝説は、プラトンの創作という説が主流であり、これまで実在したとは考えられていなかった。

ところが私は１０年ほど前に、イギリスのストーンヘンジ遺跡にアトランティスと良く似た構造があることを発見し、その情報を自身のサイト等で発信してきた。もし、この類似が偶然で無いとすると、プラトンが生まれる２０００年前のイギリスにも、アトランティス伝説と同じ情報が存在したことになり、アトランティス伝説がプラトンの創作ではなかった可能性が高くなる。地震や洪水による文明滅亡も史実だった可能性が高くなる。今回は従来の目視観察に加え、新たに画像処理計測を実施し、両者の類似をより詳しく検証し結論をまとめた(※1)。

(※1) 本研究はサイトの内容に新規要素を加えてまとめ直したもので、今回が初の学会発表になる。

Methods and Results: 手法と結果

(1) ストーンヘンジにはサークル状の遺構がいくつもあり、これがアトランティスに存在したとされる環状運河に酷似している。

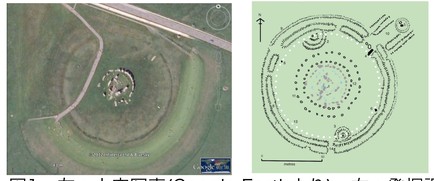

図1　左：上空写真(Google Earthより)、右：発掘調査図(Wikipediaより)

ストーンヘンジの外観からは分からないが、発掘調査によれば巨石のサークルの外側にも、石や木や溝で作られたサークルが、同心円状に幾重にも作られている。

発掘調査図(図1右)の、黒い小丸がサークル状に石が埋まっていた跡で、白い小丸がサークル状に木の杭が埋まっていた跡になる。木の杭サークルの外側には、地面を掘ったサークル（空堀と呼ばれている）も作られている。

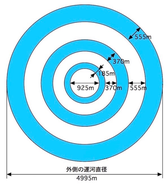

図2　アトランティスの3重の環状運河(水色が運河、白色が陸地)

アトランティス伝説には、アトランティスの中心部には、3重の環状運河が存在していたと書かれている。

この3重の環状運河を簡単に(図2)で表す。(【】内はWikipedia『アトランティス』より引用)

【アクロポリスのあった中央の島は直径5スタディオン(約925m)で、その外側を幅1スタディオン(約185m)の環状海水路が取り囲み、その外側をそれぞれ幅2スタディオン(約370m)の内側の環状島と第2の環状海水路、それぞれ幅3スタディオン(約555m)の外側の環状島と第3の環状海水路が取り囲んでいた。】

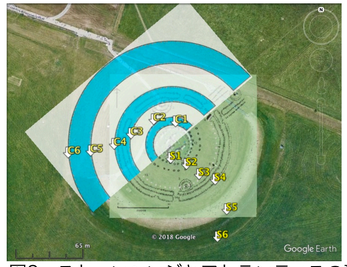

図3　ストーンヘンジとアトランティスの環状運河を重ねた合成図

ストーンヘンジとアトランティスの類似を、(図1)と(図2)を重ねた合成図(図3)を使って説明する。

環状運河に内側から順に1～３の番号を付け、各サークルにも符号を付けて説明する。

- 第1環状運河の両岸(C1, C2)が、ストーンヘンジの石のサークル(S1, S2)と一致している。
- 第2環状運河の内岸(C3)が、ストーンヘンジの木のサークル(S3)と一致している。
- 第2環状運河の外岸(C4)が、ストーンヘンジの空堀の外側サークル(S4)と一致している。
- 第3環状運河の両岸(C5, C6)に一致するのは、ストーンヘンジの草刈り跡で構造物は無いように見える。しかし、この部分を注意深く調べると、サークル状の地面の段差が南東部だけに存在している。この僅かな地面の段差を(S5, S6)とする。

(2) ストーンヘンジのサークル遺構を測定した結果、アトランティスの環状運河との比が、正確に『24:1』であった。

“Google Earth”の定規ツールを使い、(S1～S4)各サークルで4ヶ所の直径を目視測定し平均した。また、より精度の高い結果を得るため、点が明確な(S1～S3)に対し“画像処理ソフト”を自作し、重心計算を行い中心と半径を求めた。また、(S5,S6)は南東部分しか遺構が残っていないため、重心計算で得られた(S3)中心から半径4ヶ所を測定して平均し直径を求めた(図4,表5)。**各サークルの直径を伝説と比較した(表6)。**

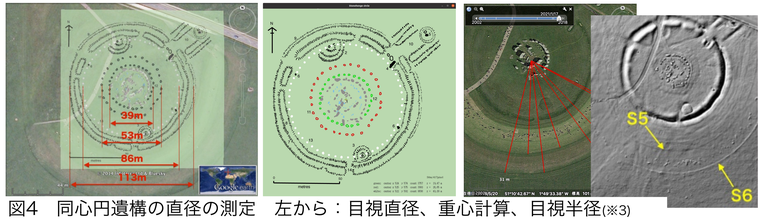

図4　同心円遺構の直径の測定　左から：目視直径、重心計算、目視半径(※3)

表5　ストーンヘンジのサークル遺構の直径

ストーンヘンジ	目視測定(m)	重心計算(m)
S1	39	38.9
S2	53	53.3
S3	86	86.2
S4	113	-
S5	167	-
S6	205	-

表6　アトランティス伝説とストーンヘンジの直径比較

C:アトランティス伝説(m)		S:ストーンヘンジ(m)		比	誤差(%)
第1環状運河(C1)	925	S1	38.9	23.8	-0.9
第1環状運河(C2)	1,295	S2	53.3	24.3	1.2
第2環状運河(C3)	2,035	S3	86.2	23.6	-1.6
第2環状運河(C4)	2,775	S4	113	24.6	2.3
第3環状運河(C5)	3,885	S5	167	23.3	-3.1
第3環状運河(C6)	4,995	S6	205	24.4	1.5
			平均	**24.0**	-0.1

(注) 比 = C / S、誤差 = (比 - 24) / 24

(3) ストーンヘンジとアトランティスが偶然に一致する確率をシミュレーションした結果“0.000044%”以下と思われる。

ストーンヘンジが“1/24”に縮小して作られたと仮定すれば、個々のサークルの縮小誤差は最大“-3.1%”で、平均誤差に至っては僅か“-0.1%”である(表6)。C言語のrand関数で6個の乱数を発生させ、これと“±5%”以内の甘め誤差で6個とも一致する別の乱数群の出現に要した回数は、10万回試行した結果、平均で約228万回だった。つまり、6つの同心円が高精度で相似するという一致は、確率的に「少なくとも“1/228万(0.000044%)”以下」の現象と言え、**偶然では起こり得ないことを強く示唆する。**

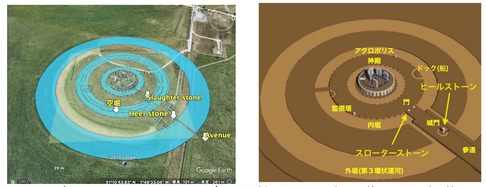

図7　左：ストーンヘンジと環状運河、右：復元図(想像)

(4) ストーンヘンジの凹みが運河を、巨石が建造物を表している可能性が高い。

第2環状運河の部分は、ストーンヘンジでは溝が掘られ空堀と呼ばれており**「地形的に一致」**を見せる(図7)。また、ヒールストーンとスローターストーンは、何故そこに在るのか分からず謎の巨石と言われてきた。しかし、(図7)右下に伸びる参道(Avenue)を、外側から中心に向かって進めば、これらの巨石は**環状島の入口**にあたる地点に正確に置かれている。ここには、環状島に入るための門があったと思われる。よって、この巨石は門を表しており、同様に中心部や他の巨石も、重要な**「建造物」**を表している可能性が高いと考えられる。

Conclusion: 結論　ストーンヘンジは、アトランティスのモニュメントである。

縮小の精度と構造の類似からみて、ストーンヘンジとアトランティスの一致を、偶然の産物と考えることは不可能である。ゆえに、ストーンヘンジは、**アトランティスの精密な縮小施設『モニュメント』として、意図的に設計建造された**と結論付けられる。

Discussion: 考察　アクロポリスには、馬蹄形に配置された巨大な神殿群があった。

本研究により、アトランティス伝説の根幹は**「プラトンの創作ではなかった」**ことが証明された。また、凹みが運河を表し巨石が建造物を表すという**「モニュメント説」**により、ストーンヘンジで特徴的な「中心部に林立する巨石」は最も重要な建造物を表したと考えられ、アトランティスのアクロポリスには**『馬蹄形に配置された神殿群があった』**という仮説が導かれる。つまり、アトランティス文明は、巨大な同心円の運河という都市設計と、直径925mものアクロポリスと、そこに建造された大神殿群など**「かなり高度な文明だった」**ことが窺える。

今までアトランティスは、実在するはずがないという先入観から**全てが歪められ**て語られてきた。これからは、約1万2000年前の大洪水や大地震の可能性も含め(※2)、学術的な更なる検証と、広い分野での真摯で活発な議論を期待する。

(※3) 引用元 https://www.slideshare.net/trompet/recent-survey-work-at-stonehenge

(※2) 昨年の本大会で、北米の氷床湖を起因とする大規模洪水発生についての研究を発表した。